



外郎(若)重筆

鶴田真容編輯

二編上

大塩語

乃梅

浪華

木宗 梓

A 467  
3

浪華 西梅 大塩 諱

鶴田真容編輯



石橋三郎  
尾柳三郎  
王用後神  
谷格三郎  
の義子  
れ元より  
おのふれ  
かたのふれ

申程万石の御家  
御家の威をうけて  
御家の事仕  
出さん由付り  
御家の事仕  
御家の事仕

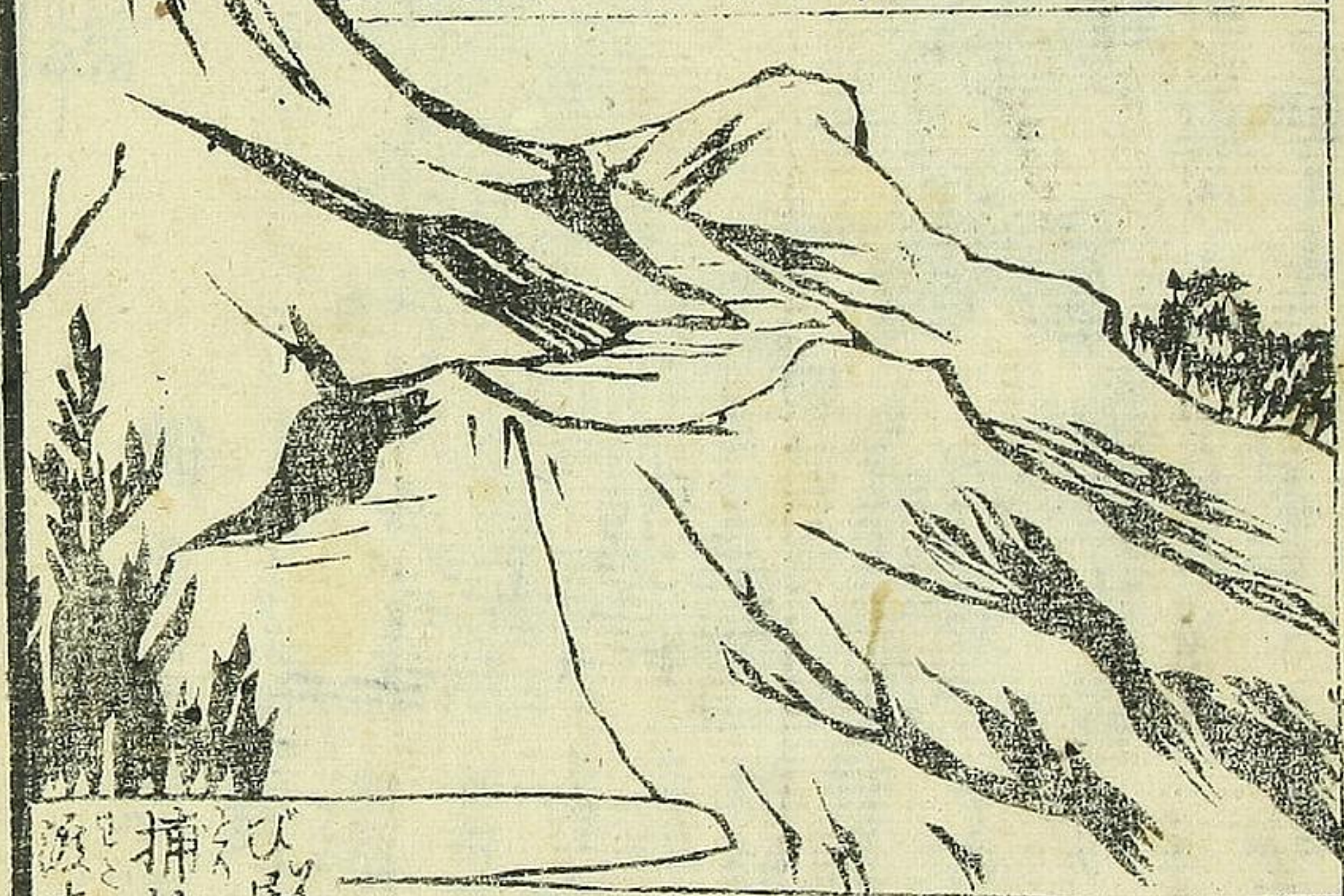
仙石家を  
御家の事仕  
御家の事仕  
御家の事仕  
御家の事仕  
御家の事仕  
御家の事仕  
御家の事仕  
御家の事仕  
御家の事仕

68-8132

勢州江  
剛國さ  
の鹿山田  
村將軍  
の社圖

忍びよ左京  
の大事を知し  
轉行總尋  
けり轉の合  
詮者  
せひかく一月

寺ありてその身の上を明し  
友勢と改名して往く松尾寺の  
者申渡され給く身をも  
のひかり去る左京へは多  
早くも知り召捕せん



松平用  
防の  
の仙石勢の  
士はて罪有  
て詮者の不  
一月寺も忍  
び居申す  
捕仙石を  
渡す

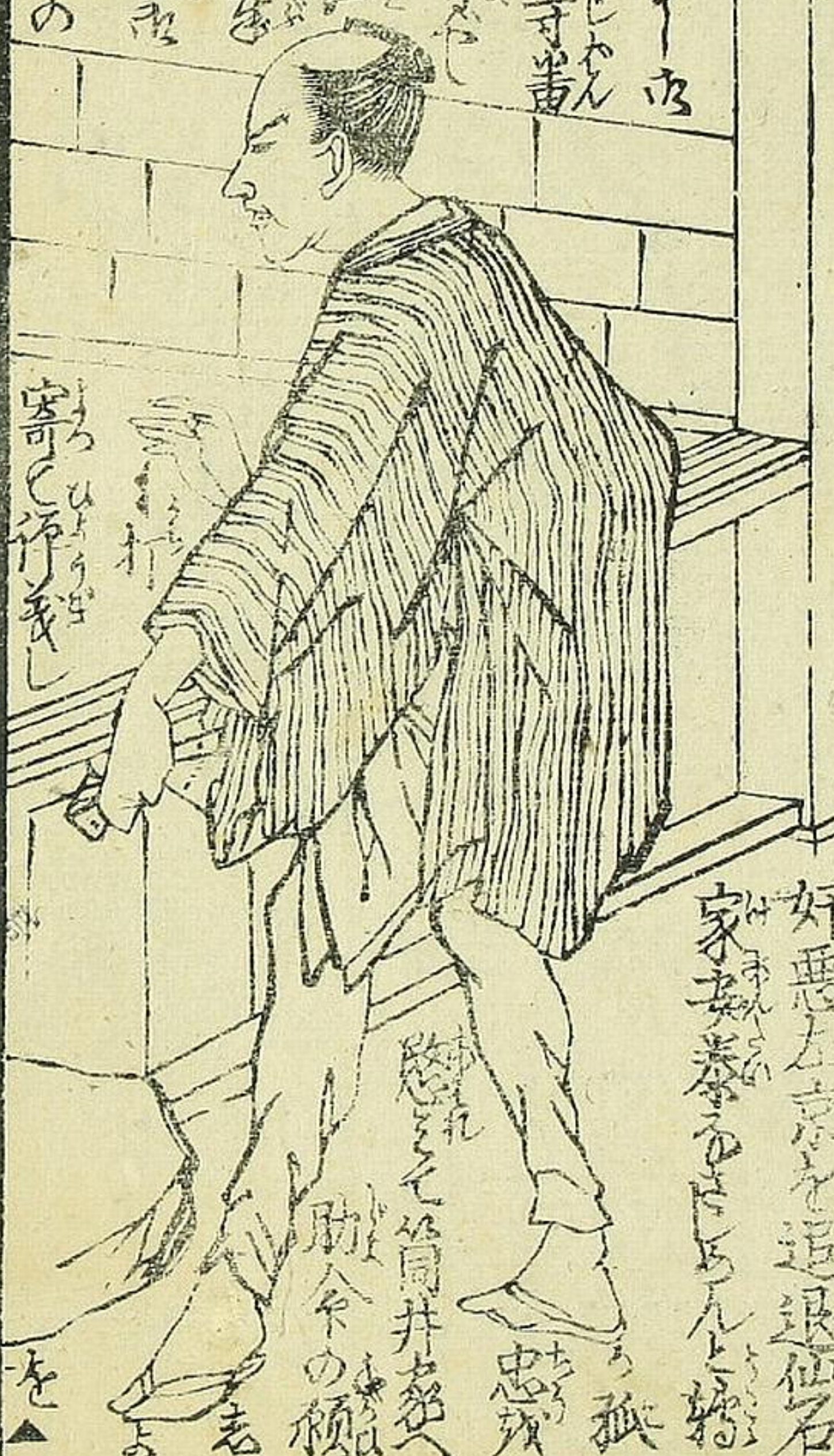


と思ふも宗意  
も武門不幸の土  
の隈りして  
へ入初ハ罪  
るも手を  
下す  
るる  
五ノ様  
虫圍か  
よひ  
鬼角  
上ノ威光を  
以て召捕る然すと

差圖は丹所方  
ふ力回心其後  
申渡され給  
も今ハ後僧友  
我者宗用ありて  
其状を  
持行途中  
に手力回心大  
勢の  
り  
と何  
色者ん治ると右左  
糸のけ又御つくを

○ 腕拾上大音  
我一月寺看主  
友我ちいもの物  
あり藤上り

○ 櫻木殿の元一  
二月寺番  
利一同道の上  
しんてい手八  
付く意見は龍  
初因并伊賀の  
後不連行有る



○ 事八仙石家忠臣  
逆臣在京  
何者  
けんや河平  
奸悪左京を  
家妻奉  
忠  
を

○ 入宰御付ら  
と一うは事早く一  
月より早くは備共



けい  
長年中の  
正置武門の  
止て浦さ

れ市  
右右  
松の里  
不冬  
捕  
宗門の  
さ入捨置  
可ふ赤ら  
珠ふ友我  
の

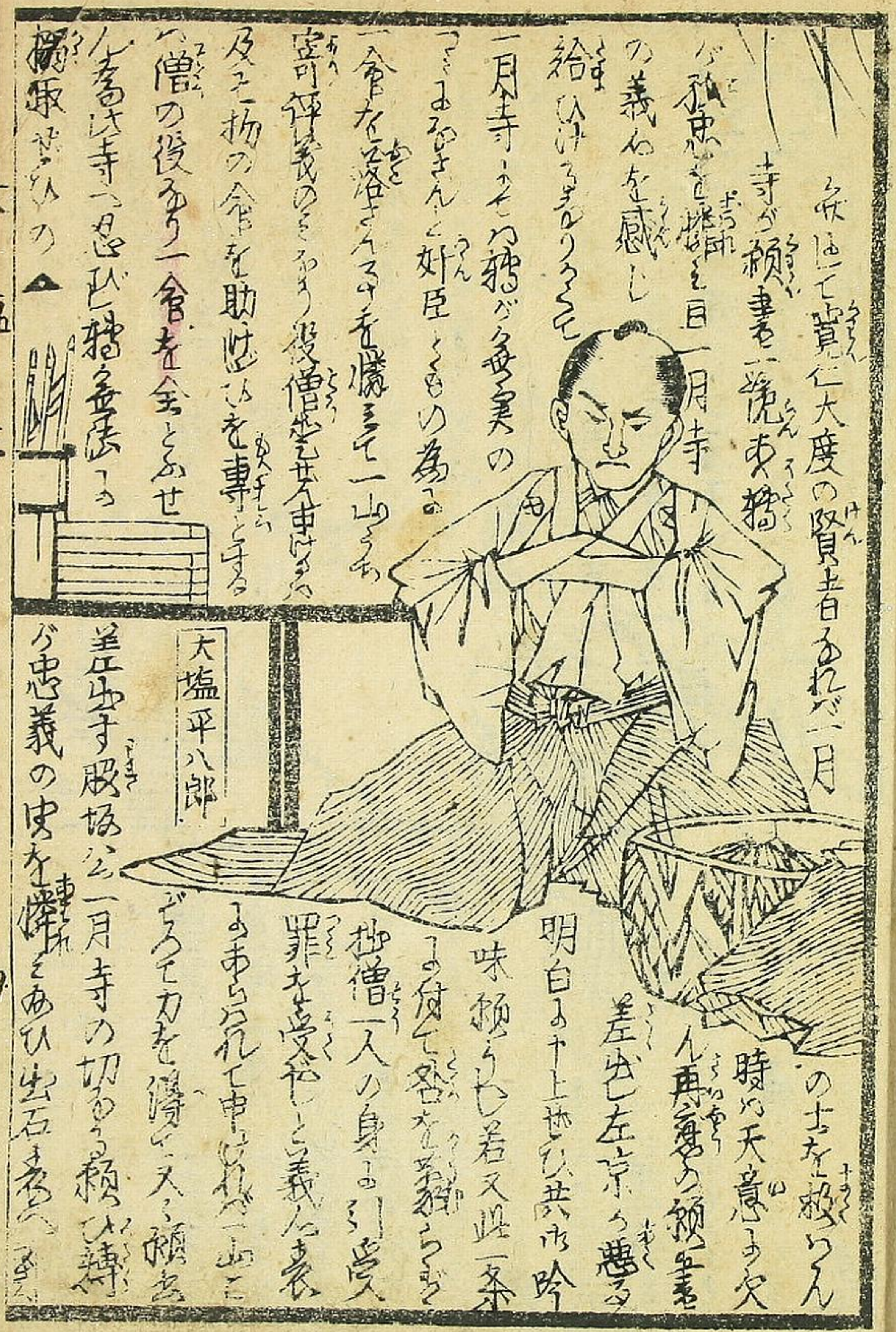
安ゆ



仙石家より引渡あるとの風聞  
 されば更なる引渡ある以前より轉が認め  
 置し左京の悪事の箇條書きを二月寺願書に  
 添て寺社内奉行に出訴する由二月寺役  
 僧達各人の轉が助合の願ひ差出せしむと有毎  
 中沙汰ありれば又寺社内奉  
 行不願書を以て宮官

大塩格之助

又吟味を  
 願ひける時の由あり  
 殿坂中務大補安薫君と  
 寺社奉行より再勅して義り明



依はて賢仁大度の賢者あるれば二月  
 寺が願書一覽あり  
 仙石家と推し目一月寺  
 の義心を感じ  
 給ひけるなりとて  
 一月寺の轉が各々美の  
 一合を各々を憐れて一月寺  
 寄附は義のより後僧達を申す  
 及之物の命を助けしを專とする  
 僧の役より一合を金とせ  
 人等は寺に思ひ轉が各々

大塩平八郎

差出す殿坂公一月寺の切なる願ひ轉  
 が忠義の史を憐れとあひ出石を

の士を救はん  
 時の天意より欠  
 人再勅の願書  
 差出し左京の悪事  
 明白より上世に共吟  
 味願うし若又此一条  
 一付て怒を蒙り  
 拙僧一人の身より受  
 罪を受せし義人表  
 一申され申せり一月寺  
 どの力を憐れ又願書

市中の人々  
五穀実ら  
ず米銭尽  
て餓死す



山形  
左京が忠  
を國中悪  
ある宮一  
寺社身  
吟味と  
追々吟味の上  
車松平

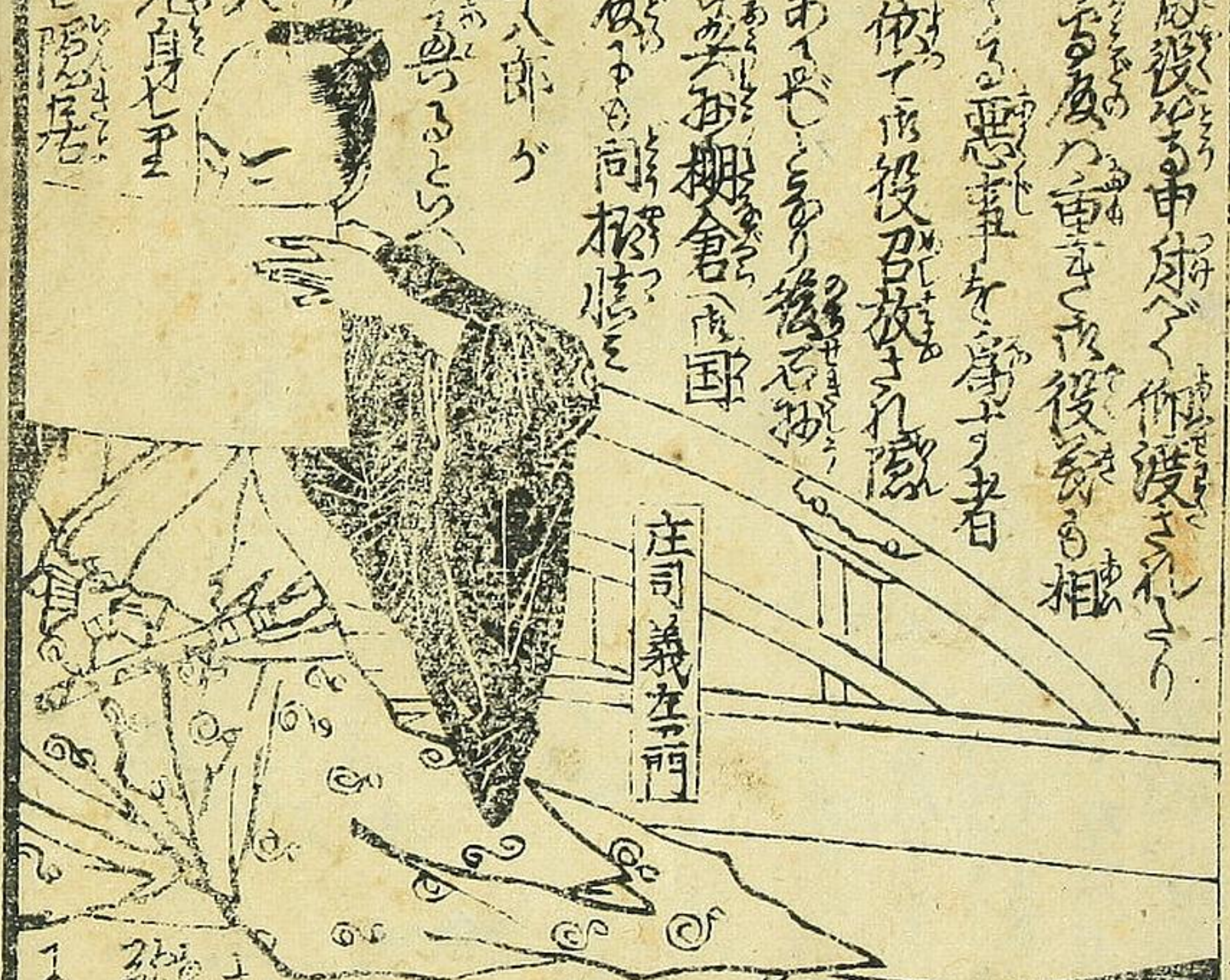
西岡谷七西出門平仙石  
小太郎青木  
禪左門大木林登岩田丹大  
大惠崎又右工門徳永正右  
工門早川保助  
已々右の者其吟味中  
揚り在い仰付られり  
賢者の吟味  
速はて左京  
が好悪一時  
らるる人全  
樽が忠を  
台上天助



表より  
内當地呼  
る其  
左京荒木  
酒田清  
青木源左  
官兵  
右工門  
馬

石小太郎重追故山岩田静馬松  
系丸罪  
其助遠島仙  
追放大森登岩田丹大夫惠崎又  
右工門徳永半右工門山左耕兵早川保  
助

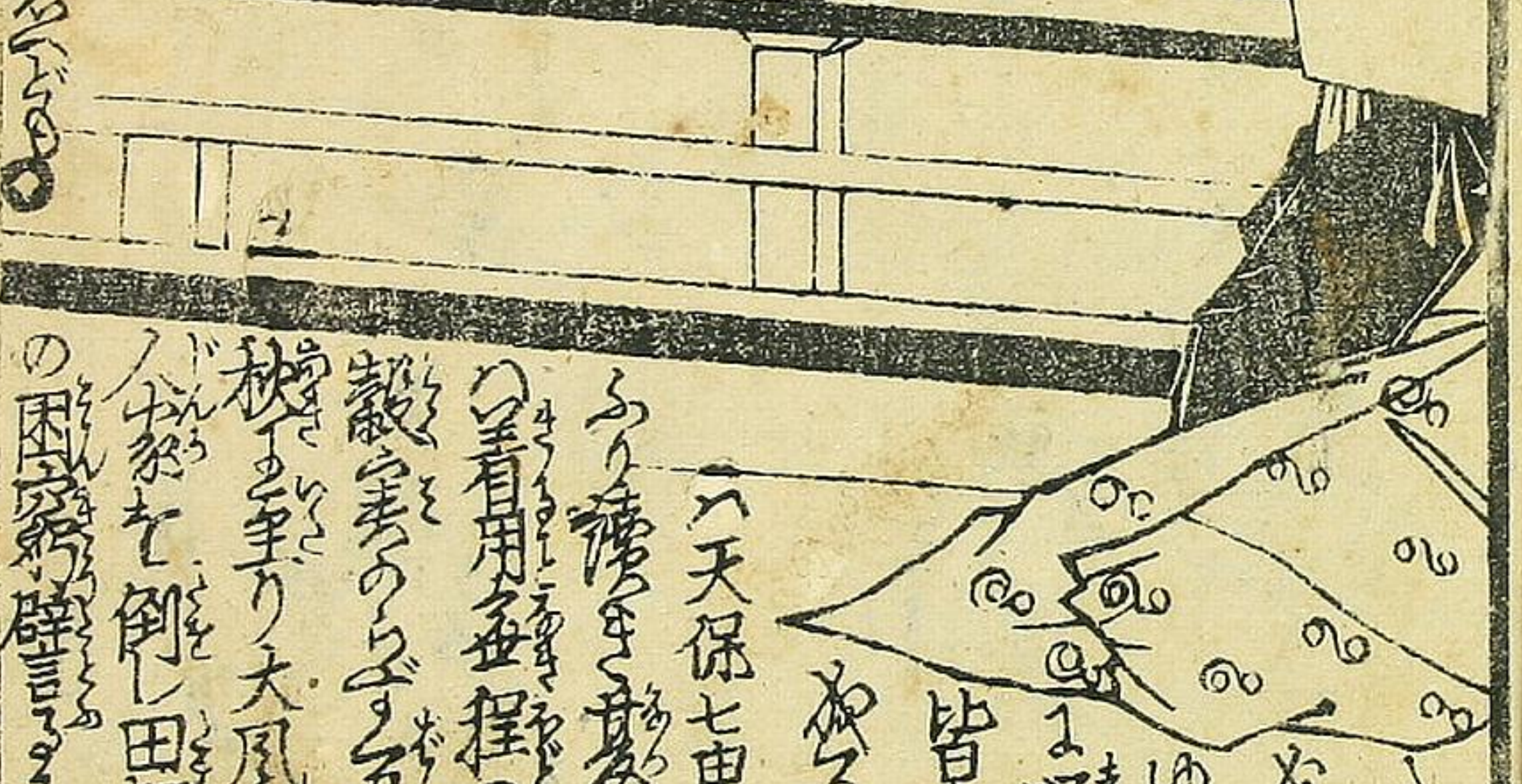
國がまゝ美しう後役なる申付ぐ作渡されり  
 松平周防の重なる後役なる相  
 勤る身より悪事を為す者  
 共組せられし依て後役放され  
 居仰付られし後役なる相  
 濱田の領地取上りお榎倉の国  
 督より松平主税及もの同相  
 仰付られし皆大塩平八郎が  
 坊村の牛よりあること  
 とも節で知者あり  
 ける松平八郎大  
 事ある依て一先身七平  
 ぞらるるを平八郎と隠居



庄司義左門

一紙をも受か  
 れば愛妾ゆ  
 らるの概を  
 送りゆく  
 送るの概を  
 かねがね  
 是正を持  
 小平八郎見  
 外口大なる怒  
 不達罪を  
 さんとするゆ  
 罪を耐す  
 居

極ひ差出牌格と助  
 式相讓り身八河内  
 一風流は隠定を出来  
 隠定を専らと肉八兵衛  
 軍書をもを妻は正有  
 る八知す大坂市民平八郎  
 退敷を寄贈し  
 て贈しと平八妻をゆ  
 いえお町の拉女あり  
 十を裁きて刺殺させ  
 仕へりいお海とい  
 預ひの策とて取次を  
 平八へ何れか送り



天保七申年春より  
 ふり渡り其とい  
 の着用金程の  
 穀実のふり  
 秋より大風大雨  
 命を倒し田畑  
 の困窮

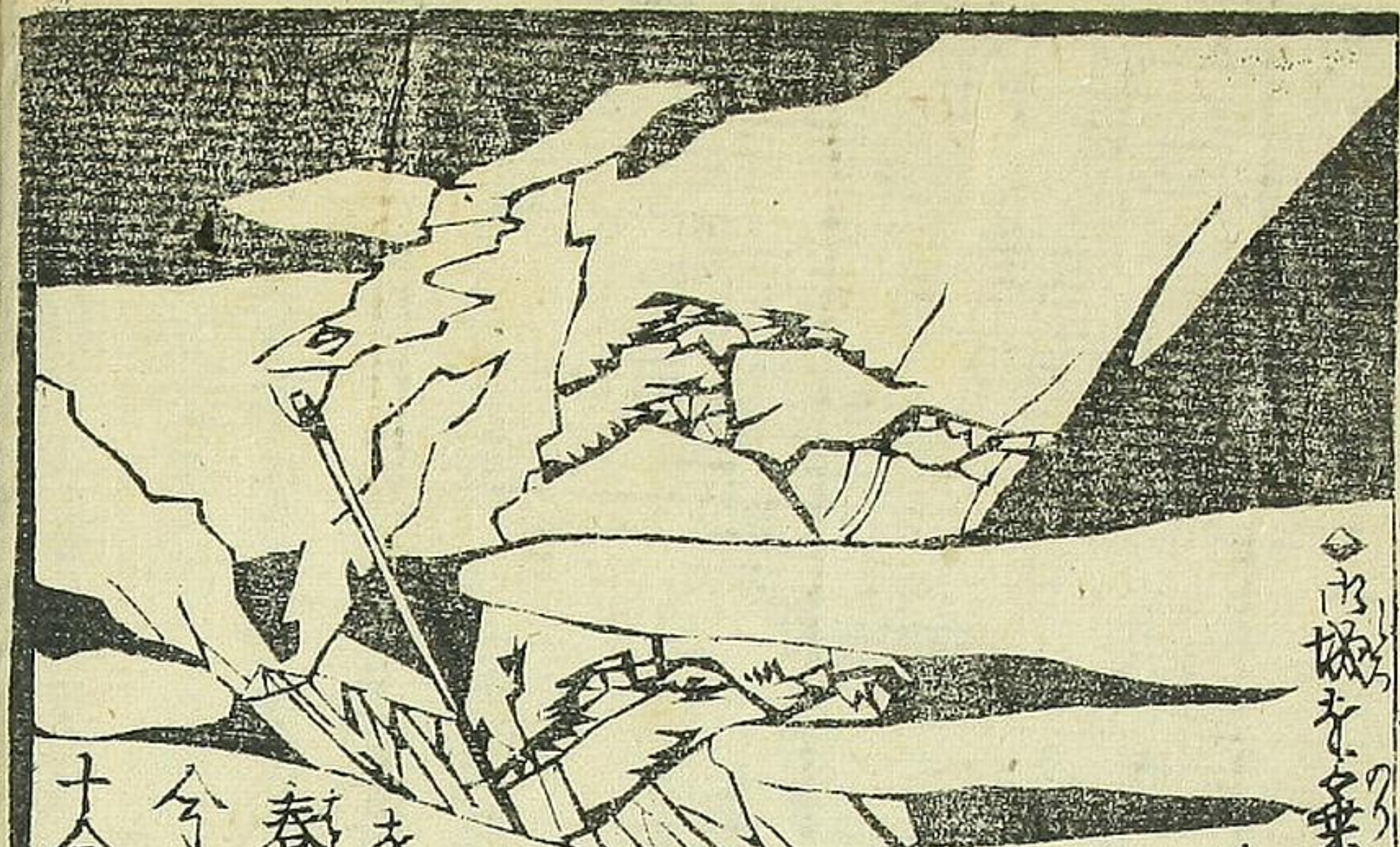


春よりの米穀をて飢死  
 する者夥多今この價をせよ  
 賣買する者ありしと富  
 る者の盡し棄て諸人の心を苦しむる  
 命取り取らざる益救民の道と公儀とれを  
 不便の由思召米穀多下し置れ  
 不しよ小を運置れ飢死せんとする  
 者を多く救せぬひけり富貴の町人ひ  
 性の強き分限も米穀を散るを急を  
 極ひしを平八郎時とすあれとは豊の

計らんと書物諸を見り  
 いふ及たす持傳へる由  
 屋敷に賣拂諸人極  
 且近々の百姓ども令来づく極てり  
 是のゆゑあれども極てり

○才志あり然し救らるの頼まり万一は天満んふ火事おら  
 遠近を顧みず馳本の救られ申せし尺管頼とけし皆一同恩を  
 謝し名活してぞぬりけり極を大ゆ成就ありし由  
 んを合せたる輩も招下林太夫十四才は昔自は西彦根  
 井伊屋の家老の子息して七年以前の歳事しよ平  
 八郎方へ寄席して遊る十七才あるれども中々平常の小兒  
 と遠ひ眼中尖る才智備り満れ一方の大將ありし

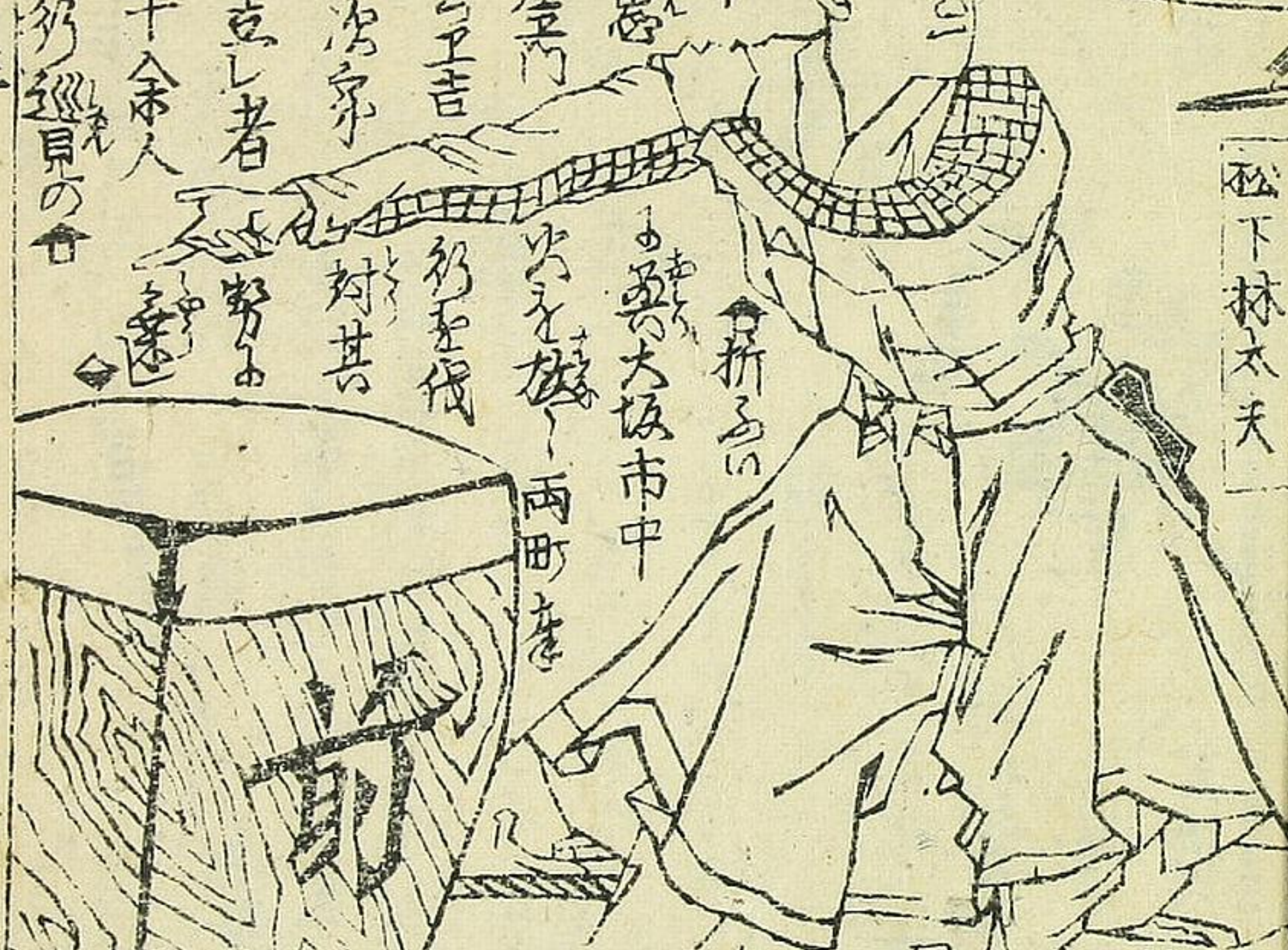




此城を棄取んと專ら手苦を定むのみ叔平八郎を  
 は企の初めより身におき者と思ふ物意なき  
 子傍等が事なき事なき差殺さんと思ふ事なき  
 されど信するを考ふる事なき妻子を殺し志なきを  
 固らん安けき事なき近隣は事なき知りて返らん  
 船の基からん又女子どもを考ふる事なき  
 一は一条の行きの妨げあり一先京地の捉里  
 逗留をせしむるを考ふる事なき事なき人をして  
 自害を勧めんといふ決して京越へまじける事  
 を今生の別事とも知らず事なき事なき事なき事なき  
 春の半むの事なればより事なき事なき事なき事なき  
 今らん事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき  
 十分る備ひが同志のものを集會は度町

松下林太夫

右多工一陽四道今  
 人整ふ加つけ其外生  
 司義左門波  
 切良左門道  
 着様と弟大井正一弟  
 齋田海之助父心泉惠  
 治守守口村白井幸左門  
 齋若寺村播本右多工吉  
 見本守右門平山助治守  
 を初めにして大將多重立し者  
 凡百余人親兵共三十余人  
 當二月十九日兩町奉巡見の會



折ふの  
 大坂市中  
 火を焚く  
 初を伐  
 村其  
 勢の  
 山城  
 山城の  
 同道して  
 祖彦若  
 有當中  
 古縁の  
 有た  
 格あり左  
 有死を

大 益 三

不意なること

つて両を討取らるる

火を掛るる中と云ふ

代出馬を討取らるる

討取らるる

を奪取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる

討取らるる



郎人故を集むる為近国の

世の皆一同の服せり乎八

つて民を極むるなりと申

獲を極むるは天下代

老し各々方より後

懼るる謀るる伏

んんあまの

百姓もいふ極むるを出しの回来る事

十九日早朝よりあつまるる

申あり健やあつまるるものを極むる是誠也

と解るる其又外も版外も極むるも趣意書を神社井園

張りて其文も曰四海因窮せり天禄終り終り小の國家を極めしめ災

言を極むる昔の聖人論天下後世人の君人の臣なる者を戒め置れ

其意照神君も云ん六孤獨を極むる極むるを極むる極むる

其意照神君も云ん六孤獨を極むる極むるを極むる極むる

本意を極め大切の改るるも極むるも諸役人も賄賂を會するも

分りて重き極むる上り一人一家を極むる極むる極むる

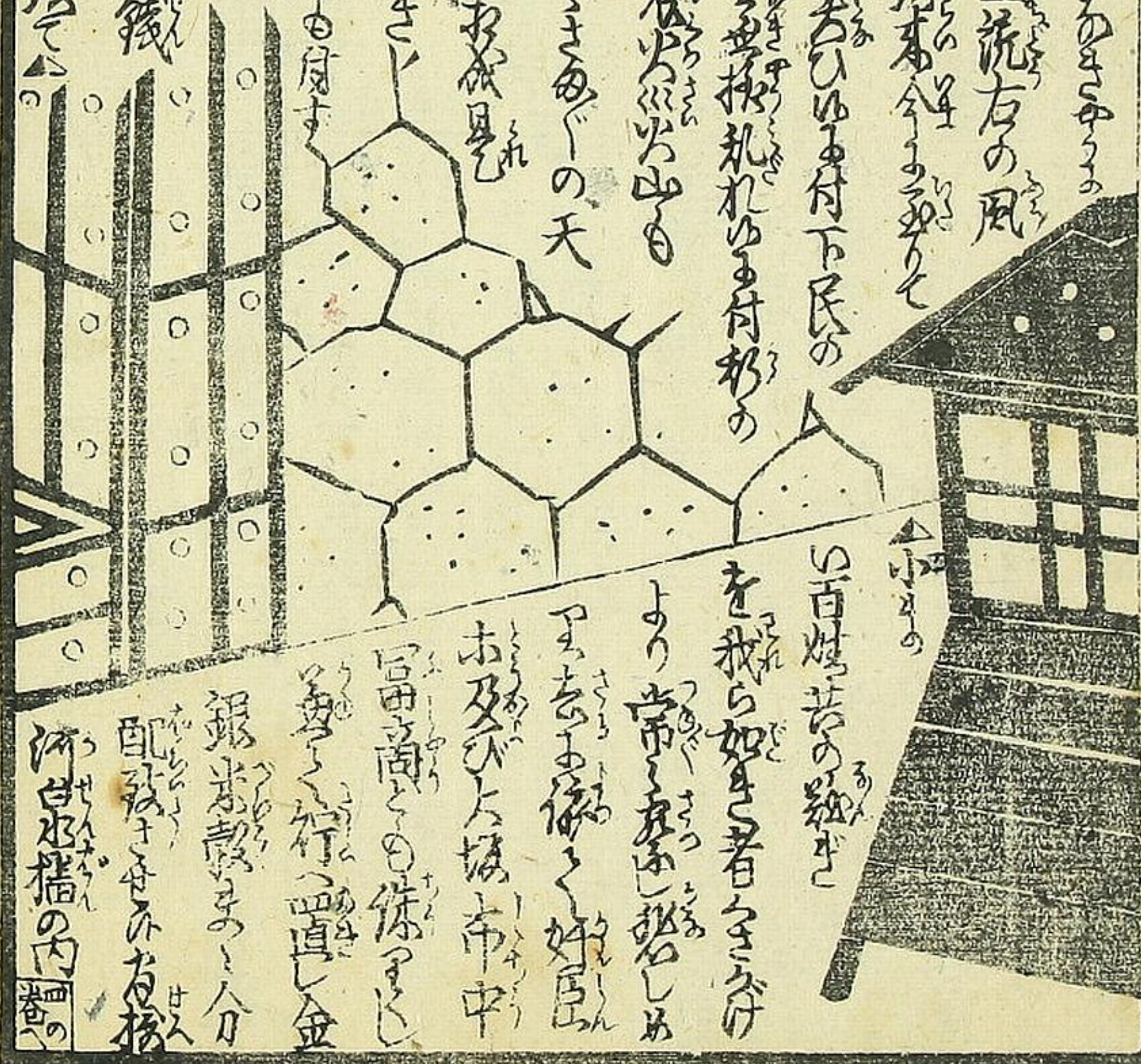
多の民百姓もいふ遠く用金申付是までも年貢諸役の甚なる事

上りの通るもいふの事を申極むる極むる極むる極むる

上りの通るもいふの事を申極むる極むる極むる極むる

同子守人の上を死にまゝなる者ありて  
 放つゆゑに江戸生者より法蘭西流石の風  
 俗にまぎれ入りて天子の御利益を今もあつて  
 以て居る同格者罪の極をまひひも付下民の  
 怨をこころとて告げゆるる方と被れぬ付初め  
 如き悲劇をたゞ通年と地覆りぬ火の  
 崩れたるものありてより外色とまゝの天  
 災の流しし竟るる禍をせんのお救見  
 百二十より海く遊めりて有難き  
 此若しははる昔一向とて人もんも付す  
 るや小人野者の輩大切の政  
 工を取らむひ下をあるは米錢  
 取立る手帳をるるもお掛まつて

小町の  
 百姓共の騒ぎ  
 を我ら如き者なきに  
 より常々お心懸しめ  
 去去と倅々好意  
 お及びたは市中  
 富商の儲けに  
 銀米敷まゝに分  
 配致すやみち極  
 河内水播の内



010190510943

